



TOKYO KITAN

東京鬼譚

菊地秀行

Kikuchi Hideyuki



菊地秀行

東京鬼譚

著者—菊地秀行 発行者—井上功夫

発行所—株式会社双葉社 東京都新宿区東五軒町三—二八 郵便番号一六二

電話・東京(〇三)五二六一—四八一八(営業)

(〇三)五二六一—四八三三(編集)

振替・東京八一—一七二九九

印刷所—大日本印刷株式会社 製本所—株式会社若林製本工場

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえます。

定価・発行日はカバーに表示してあります。

©菊地秀行 一九九二年 Printed in Japan

墓碑銘	〈新宿〉	5
水泡	〈銀座〉	29
麗子の顔	〈渋谷〉	55
無差別飯店	〈赤坂〉	83
記憶違い	〈原宿〉	109
薬売り	〈六本木〉	133
ホテルの客	〈日比谷〉	161
鬼女返し	〈浅草〉	189
欠陥本	〈神田〉	215
幻獣想	〈品川〉	241
あとがき		266

装画 池田夕ク  
装幀 岸顕樹郎

東京鬼譚



墓碑銘  
〈新宿〉



はじめて、新宿の高層ビル街を見せに連れ出したとき、祥子は例によつて嫌がった。

「面倒くさいんだもの。それに、ビルを見たつて、面白くもなんともないわ。ただ、高いだけなんですよ？」

「高いだけじゃない。高いだけなのがたくさんあるんだ。日本とは思えない眺めだよ」

「どこでもいいのよ、私。アメリカだつて、南極だつて同じなの」

またか、と思つた。腹は立たなかつた。祥子が今より十歳年を取り、ウエストが二〇センチも太い赤ら顔の女なら、投げやりな言葉は、それが似合わぬことにも気づかない無雑な神経の表現となる。だが、繊細なガラス細工を思わせる血の薄い貌と、哀しいくらい細つこい手足には、よく似合つた。

祥子が外へ出たがらないのは、風にとばされ、何かにぶつかつて碎け散るのが嫌だからだ。——一時期の私は本気でそう考えていた。

投げやりといったが、それには、こちらの思い通りにならないから、どうでもいい、というような功利的な趣きはなかつた。

祥子はいつとも、私たちとは別のところにいたのだ。

ある秋の深夜、虫のすだきを快く耳に止めながら帰宅した私は、明りだけが出迎えるキッチンで背広を脱ぎ、奥座敷の襖を引いた。祥子は眠っているはずだった。

ひっそりと横たわる細い身体だけが眼に灼きついた。電灯はついている。祥子の姿ばかりが何故印象的なのか、私は襖の端に手を乗せたまま考えた。

音はない。虫の声も絶えていた。細い糸のような音を聴いた。祥子の寝息だった。

生きているんだね、おまえは。——痛切にそう思った。

いつの間にか、私は涙を流していた。世界のすべてと、祥子だけが違っている。私にはどうすることもできず、何とかしてやれるのは私しかない。そんな哀しさだった。

今になって考えてみると、祥子は何処にもいなかったらしい。

朝食を摂っていると、

「ごめんさい」

と、席に着く。

「遅れたな」

と笑いながら見ると、口元へ持ち上げたトーストの端は、少しかじってあったりする。はじめて、私は、彼女がいつからそこにいたのか気づく。

「朝刊取ってくるのを忘れたわ」

という声が甦ってくる。

自信がなさそうな、立ち上がるときの仕草も憶い出される。

一度、祥子がそこにいないかのごとく——本当にわからなかったのだが——ふるまい、気づいてすぐ、

「済まん」

と詫びたことがあった。

祥子は、ちらりとこちらを見て、黙々とサラダを口に運んだ。妻のいないことに気づかぬ夫が世界中にいると納得している風でもあり、そう気づかせぬ妻が普通なのだと告げている風でもあった。

出勤する途中、近所の主婦と一緒になったとき、

「××さんが、びっくりしてらしたわよ。越して来て一年になるけど、お宅に奥さまがいるのに、はじめて気がついたって。ご主人は独り暮らしだと思われてたらしいわね。亭主の留守を見計らって、掃除か洗濯に行つてあげようと企んでいたんですって。あたしたちみんな笑つたわ。奥さんは何回となく××さんと買物と一緒にしてるのよね。そう言うと、何処よ、何処にいるのよって、青くなってるの。そのままいくと、奥さんのこと幽霊か何かと間違えかねないから、二人以上で行くと、みんなそうなのよ、と安心させといた。もうひとり相手がいると、みんな、奥さんのこと忘れてしまうのよ。——ごめんなさい、影が薄いつてわけじゃないの。でも、そうなのかなあ。奥さん、遠くの街の出なんですつ

て？　なんか、透きとおつて、東京じゃあ長保ちしそうにない、壊れやすい人形みたいな気がする」

幾日かたつて、この話を憶い出した。

「人形なんかじゃないわよ」

と祥子は否定した。珍しいことだった。

「似てるけど、違うわ。——あなただつて、わかつてくるくせに」

「わからないよ、何だい？」

祥子は私を見つめた。眼が、嘘つき、と言っている。何であれ、意識されるというのは人間にとって生き甲斐みたいなものだ。

「みんなと買物へなんか行くから、そうみられるのね。本当は、私、外へなんか出たくない。出るのなら、ひとりで行きたい。みんなとは違うのよ」

「おれとも、かい？」

「そうよ、あなたは生きてるもの」

その言葉を、私は前に一度だけ耳にしたことがあった。

記憶を辿っていると、

「結婚を申し込んだときよ」

と言われた。

山形の青い森陰に眠るような街に、会社の支社と祥子の家はあった。転勤を命じられた私が、到着してはじめて口にした麦茶を運んできたのが祥子だった。

半年後、私は祥子を一軒きりの喫茶店に誘った。窓の外は白く染まっていた。冬だった。

予想していた通り、祥子はすぐには首肯しなかった。

入れたてのコーヒー・カップを口元に運びながら、私を見つめた。笑っているようだった。陽気のせいだろうと私は思った。

少し間を置いて、祥子は私でよかったら、と言った。

「きつと、平凡な、普通の奥さんになれるでしょう。万がいち、そうならなくても勘弁して下さいますか？」

出来れば、外へは出ずに家にいて欲しいと直截に告げると、

「そういう意味ではありません。すぐにわかりますが、私は他の人とはちがうんです。誤解しないで下さい。本当はそんな気がするだけなのですけど、私はここにはいけないような気がするんです。つまり、あなた方は生きていて、私はそうじゃない、と」

祥子は、高層ビル街を見たことがなかったのかもしれない。

西口の改札を抜け、小田急デパートのエスカレーターで地上へ出ると、その場で動かなくなつた。

驚いたのだろうと、私は単純に考えた。

「凄いい眺めだね、後でゆっくり歩こう。その前に、商談をすませてくる。君はその辺を――」

祥子が首を横にふる前に、私は間違いに気づいた。

「いやよ。こんな人の多いところはたくさん。あなたが見えるところで、終わるのを待っているわ」

「それでは、連れ出した甲斐がないよ。たまには大都会の雰囲気味わうのも、気分が変わつていいかと思つたんだ。君が外出嫌いなのはわかつてるが、少しは殻を打ち破つてみるべきじゃないか。いつまでも、銀座や六本木は知りません、新宿なんか行ったことありませんじゃ、笑われるだけだよ」

「笑われたって平気よ。あの人たちに」

祥子の主張に込められた願いを、私は理解できなかつた。意地の張り合いだと思つた。

通行人の顔が、幾つもちらを向いた。うす笑いを浮かべた若い男の顔が眼に入った。

「とにかく、商談中にそばにいられちゃ気が散って敵わない。あそこが気に入ったようじやないか。一時間ぐらい散歩しておいで。待ち合わせはここにしよう」

「いいの、行っても？」

祥子は訊いた。今までとは、うつつが変わって静かな声だった。決定的なものを私は感じた。

「行きたいけれど、行つてはならないような気がするの。私はあなたといたいなのよ」

滅多にないことを祥子はした。腕に巻かれた白いブラウスを、私は一瞬見つめ、わかつたよ、と言おうとした。それが正しい判断なのだろう。

私はそつと、祥子の手を外し、

「とにかく、仕事の邪魔をするな」

と言つた。

祥子は微笑した。雑踏の中で、それはひどく痛切に私の胸を打った。

「新都心の方へ行くのなら、向うに横断歩道がある」

私は左手——京王デパートの方を指さした。そちらの方角へ、祥子は後じさりはじめていた。長いこと一緒にいた恋人に、運命的な別れを告げた後のように。

「行つて——来ます」

白い背中がこちらを向き、色とりどりの雑踏に混じつた。それが京王の角を曲がつて消えるまで、私は見送つた。

眼に染みるブラウスの色は、泥川の流れに浮かぶ花のように、いつまでも網膜に残つていた。流れはひどく早かつた。

喫茶店で一時間粘り、電柱のところへ戻ると、すぐに門が開いて祥子が現われた。

時間通りだつた。これまでに三度、確かめてあつた。頼りなげな澄んだ印象は、薄い化粧をし、鮮やかなブルーのスカーフを巻いても変わらなかつた。

九月はじめの午後四時。街に溢れる白い光を、うつとうしく思うものもいるだろう。

見失わぬぎりぎりの距離をにおいて、私は妻の後を尾けはじめた。

駅まで十五分。バスはない。これまでの経験で、最も気づかれ易いのは、駅のホームと電車の内部なかだつたが、私は心配をとうに捨てていた。

祥子は一度たりとも後ろをふり向かなかつた。愚かな亭主を馬鹿にしきつていたので、自分の行動に自信を持つてゐるのでもない。これから行うことの意味など、意識して



もいまい。

祥子の関心は、彼方に待つものにしかないのだろう。

急行電車が到着すると、私は隣りの車輛に乗りこんで、祥子の様子を窺った。進行方向右側の列である。祥子は吊革につかまり、私は座席にかけていた。

新宿まで十五分足らずの時間を、恐らく祥子は、電車の震動以外、身じろぎもせずに通したであろう。

一度だけ、下北沢から乗りこんだ女性客が、隣りの吊革につかまるところでよろめき、祥子にぶつかった。

驚きの表情が、こんな場合に私の笑いを誘った。ぶつかるまで気づかない隣人を、他人はどう思うだろう。新宿のホームに滑りこむまで、女性客は繰り返し祥子の方を眺めていた。

乗降客の数と混雑は、私の視界から祥子を奪い去るのに夢中だったが、あわてる必要はなかった。

距離をとるのは、尾行につきまとう習慣と後ろめたさのせいだ。横に並んでも、祥子は私に気づかなかつたにちがいない。

地上へはすぐに出ず、祥子は地下のコンコースを抜けて、いつもの階段を上がった。